

ゲオルク・フォルスターの『ライン下流地方の風景』

高木昌史

序

ドイツの博物学者ゲオルク・フォルスター Georg Forster (一七五四—一七九四) (図版 1) の『ライン下流地方の風景』、正式題名『一七九〇年四月、五月および六月のライン下流地方、ブラバント、フランドル、オランダ、イギリスそしてフランスの風景』 Ansichten vom Niederrhein, von Brabant, Flandern, Holland, England und Frankreich im April, Mai und Junius 1790 は、⁽¹⁾多様な内容に彩られた魅力的な紀行文である。

一七九〇年三月二十五日、すなわち、隣国で革命が勃発

した翌年、フォルスターは若きアレクサンダー・フォン・フンボルト⁽²⁾を伴い、マインツを出発、ライン河を下って、今日のベルギー、オランダを周遊した後、さらに海を越え、ロンドンを起点にイギリス各地を巡り、ふたたびドヴァー海峡を渡って、カレーからパリを目指し、当地に数日を過ごしたあと、同年七月十一日、帰国した。

以上、三ヶ月半の旅の記録は、フランス革命直後のヨーロッパ各地の様子を読者の眼前に彷彿とさせてくれる、という意味ですでに貴重だが、そればかりではなく、その記録は、およそ紀行文というジャンルに特有のスタイルを確立している点でも注目に値する。本稿では、両方の観点を留意して、フォルスターの『ライン下流地方の風景』(略



図版1 ゲオルク・フォルスター (1754-1794)、同時代の銅版画

称)を読んでみることにしたい。

〔「フォルスター略歴」⁽³⁾〕

ゲオルク・フォルスターは、一七五四年十一月二十七日、ダンツイヒ(現ポーランド・グダニスク)近郊のナツセンフーベンに、七人兄弟の長子として生まれた。父ライオンホルト(一七二九—一七九八)は村の牧師で自然科学者であった。(※ちなみにダンツイヒは当時ポーランドに属していたが、一七九三年には第二次ポーランド分割によってプロイセン王国領となっている。)

さて、一七六五年三月、ヴォルガ右岸の調査旅行に出かけたフォルスター父子は、翌年職業上の新天地を求めてイギリスに渡る。そして一七七二年七月、ジェイムズ・クックの世界周航に参加する。航海は三年に及び、一七七五年七月、帰国したゲオルクは、一七七七年、その体験を大著『世界周航記』*A voyage round the World*として英語で出版、続いて、独語版 *Reise um die Welt* (一七七八—一八〇〇)を刊行する。

その間、パリを訪問したゲオルク・フォルスターは、一七七八年オランダ経由でドイツに行き、同年、カッセルで博物学の教授となる。さらに一七八四年から三年間、ポーランドのヴィルナ(現リトアニアのビリニユス)大学で教授を務めたあと(一七八五年結婚)、ドイツのマイニンツ大学で図書館司書となり、『イギリス美術史』、『イギリス文学史』等の旺盛な著作活動に専念する。

しかし、一七八九年七月、フランスで革命が勃発すると、「哲学が頭脳の中で成熟させ、その後、国家において成立させたものを見るのは素晴らしい」(一七八九年七月三十日)と語るフォルスターは、マイニンツ選帝侯が反動的な政策を強化する中、新たな活力を求めて旅を計画する。

すなわち、『ライン下流地方の風景』の旅（一七九〇）である。

旅から帰国した翌年、フォルスターはインド・サンスクリット文学の名作カーリダーサ作『シャクンタラー姫』を英語から独訳して刊行する。その翻訳は一七七九年にカッセルで知り合つて以来交流のあつた詩人ゲーテに高く評価される。一七九二年十一月、ライン下流地方の旅の帰路パリの状況を見て革命への共感を強めていたフォルスターは、マインツのジャコバン・クラブ「自由と平等の一七九二年友の会」に入会、同月、マインツ臨時行政委員会の副代表となる。続いて翌一七九三年三月、ライン・ドイツ国民公会の副議長に就任した彼は、ライン左岸のフランスとの併合決議を持つてパリに向かう。しかしドイツからは国賊として追放され、一七九四年一月十日、貧困の中にパリで客死する。

以上見るように、語学、自然科学、美術、文学、政治等に多面的な才能を発揮した人物であつただけに、ゲオルク・フォルスターが残した『ライン下流地方の風景』も豊かな内容に彩られた充実した作品となつてゐる。以下、そ

の中から数箇所を引用・紹介しながら、フォルスターの紀行文の特徴について考えてみたい。

作品の成立

『ライン下流地方の風景』は三部から成つてゐる。第一部は旅行メモと書簡をもとに、しばしば中断されながら、一七九〇年六月から十一月まで、また第二部は一七九一年と一七九二年春に執筆され、一七九一年の年号でベルリンのフォス書店から一巻本として刊行された。しかし第三部は改稿の機会のないまま原稿が残され、著者の死後六カ月目に、L・F・フーバーがフォルスターの手記を『風景』第三部として公刊した⁽⁴⁾。本稿では、アウフバウ社の二巻本『フォルスター作品集』Forsters Werke in zwei Bänden, Aufbau-Verlag, Berlin und Weimar 1979の第二巻（第一部と第二部を収録）を底本に叙述を進める。

作品の構成

『ライン下流地方の風景』は全二十七章から成る。順に、1 ポツパルト、2 アンデルナハ、3 ～ 4 ケルン、5 ～ 8 デュッセルドルフ、9 ～ 10 アーヘン、11 リュティヒ

(リエージュ)、12レーヴェン(ルーヴァン)、13〜18ブリュッセル、19リレ(リール)、20〜22アントヴェルペン(アントワープ)、23〜24ハーグ、25〜26アムステルダム、27ヘレ(ル) ヴーツルイスである。今日で言えば1から10はドイツ、11から18はベルギー、19はフランス(北部)、20から22は再びベルギー、23から27はオランダである。従つて、ここにイギリスと(リールを除く) フランスは含まれていない。その部分はほぼ次の経路を辿っている。

(ヘルヴーツルイス) — ロンドン — ウインザー — ブリストル — バーミンガム — ダービー — コヴェントリー — オックスフォード — ドーヴァー海峡 — カレー — アミアン — パリ — シャロン — ヴェルダン — メス — マインツ。

以上の旅の中から、本稿では、ドイツの数箇所およびベルギーのリエージュを覗いてみるが、参考のために、当時のオランダおよびベルギーの状況をはじめに確認しておくことにする。

「オランダとベルギー」⁽⁵⁾

両国の歴史は複雑であるが、フォルスターが詳しく叙述

しているのは、今日のベルギーの都市ではリエージュ、ルーヴァン、ブリュッセル、アントワープ、オランダでは、(デン・)ハーグ、アムステルダム(首都)である。

オランダは、昔、東フランク王国に属していたが、中世に封建化が進んだあと、十四世紀にはブルグント家、十五世紀にはハプスブルク家が支配した。十六世紀、同家が分裂すると、オランダはイスパニアハプスブルクとなった。その後、宗教改革の時代、オランダとイスパニアが対立し、一五八一年、オランダは独立を宣言、一六〇九年、実質上、オランダ共和国(ネーデルラント連邦共和国)が成立する。その後、オランダは商業国として隆盛を極め、海外にも進出したが、十七世紀にイギリスとの戦争に敗れて国力が衰え、一七九五年にはフランス革命軍が侵入、オランダ共和国は崩壊した。

フォルスターがライン下流地方を旅行したのは、従つて、フランス革命軍がオランダに侵入する数年前で、封建的な絶対主義を廃止して、ヨーロッパで初めて市民革命を成功させたオランダ共和国を彼は「想像上ではない真の自由の大地」と称えている。

一方ベルギー王国の歴史は新しい。一八〇六年、ナポレ

オンは弟ルイをオランダ国王に任命し「バタビア共和国」、一八一〇年にはそれをフランスに合併したが、ナポレオン戦争後の一八一五年、イギリス亡命中のウイレム（六世）がブリュッセルで即位し、ネーデルラント王国が成立する。しかしカトリック教徒の多い南東部の住民は、プロテスタント主流のオランダの政策への反発を強め、フランスの七月革命（一八三〇）を契機に独立運動を起こし、ヨーロッパ列強はロンドン会議でそれを承認、一八三九年、ベルギー王国が成立する。（※従って、フォルスターの当時、ベルギーという国は存在していない。）

一 ライン下り

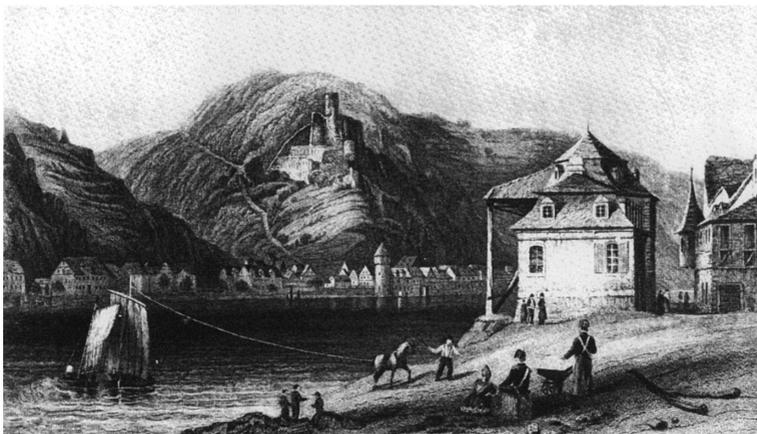
アレクサンダー・フォン・フンボルトと共にマインツから船に乗ったゲオルク・フォルスターは、先ず、船上からの眺めを次のように叙述する。

そうこうする間に、あちこちにアーモンドと桃の木、そして幾本かの早咲きのさくらんぼの幹が白く赤く蔽われているのが見えた。ラインの流れの比較的狭い部分に

おいても、葡萄の木で美観を損なわれていない山峡の裸の岩壁や段丘に咲くそのような春の子が、未来への美しい希望を我々の中に目覚めさせてくれた。「……」

我々は何時間も甲板に座って、今や穏やかな河水で爽快になった緑色のラインの波を覗き込んだ。互いに繋がり合う町々、豊かな葡萄の岸辺、遠くから招くヨハニスベルク司教座教会の建物、またロマンティックなねずみ塔や塔に向き合って岩場に懸る望楼の眺めを我々は楽しんだ。低木林の山が鏡のように明るい平らな川面に深い影を投げかけ、その影の中に、突然の太陽のきらめきに照らされて、ハトーの塔が白く浮かび上がった。河水がざわめき下る岩礁が流れを絵のように美しく引き裂いていた。⁽⁶⁾（図版2）

アーモンド、桃、桜などの花が一斉に咲き乱れるドイツの春の美しい光景が右の一節から彷彿としてくる。ライン下りのハイライトはマインツからコーブレンツである。有名なローレライの岩もその途中にそそり立っている。左岸のマインツから右岸のヴァイスバーデンに向かい、さらにライン・ワインで名高いリユーデスハイム（右岸）に行く



図版2 ザンクト・ゴアーハウゼンと猫城の廃墟、W・トンブルソン、1832年

途中の美しい風景の中に、ヨハニスベルクの教会がある（一九四二年に戦争で破壊されたが、間もなく再建された）。そしてリューデスハイムから左岸のビンゲンに移る河中島に、ねずみ塔が立っている。この塔はマインツの大司教ハトー一世（在位八九一—九一三／異説ではハトー二世、在位九六八—七〇）の伝説で有名である。

グリム兄弟編『ドイツ伝説集』によると、昔、ドイツが大飢饉に見舞われたとき、大司教ハトーは貧者を納屋に集めて焼き殺した。その様子を見て、彼らをねずみに譬えた冷酷無情な大司教を、その後、ねずみが襲った。大司教はラインの河中島に塔を建てて逃げようとした。しかし、ねずみは流れを渡って塔に這い上り、遂にハトーを食い尽くしてしまった。

美しい風景の背後には、このように悲惨な歴史あるいは伝説が隠されている。『ライン下流地方の風景』の著者が、隣国で勃発した革命に賛同し、自由と平等を求めて、その後、伝説の舞台となったマインツで活動し、最後はパリで客死した事実を考えると、右の「風景」は幾重にも意味深い。物語は中世のものだが、フォルスターが『風景』を描いたのは、ヨーロッパで絶対王政が崩壊し、新たな時代の

幕が上がり始めていた頃で、その只中にいて政治活動に身を投じた彼にとつて、司教と彼を食い殺したねずみの物語は、遠い時代の伝説ではなく、ずっと身近なものに感じられていたにちがいない。

二　ゴシック建築

ライン下りの名所を眺めたフォルスターは、コーブレンツからアンデルナハを通つて、ボンを過ぎ、やがて大聖堂で知られるケルンに到着する。ドームに関する彼の叙述は、ヘルダー編『ドイツの様式と芸術』(一七七三年刊)に収録された若きゲーテの有名なシュトラースブルク大聖堂のそれとともに、ゴシック建築論の双壁である。

我々は大聖堂に歩み入った。そして深い暗闇の中、もはや何物も区別出来なくなるまでそこに留まった。ケルンを訪れるたびに、私は何度もこの壮麗な寺院に赴き、崇高な身震いを感じる。巨匠の作品の大胆さを前にすると、精神は驚きと感嘆のあまり大地に倒れ伏す。その後、ふたたび同じ精神の(一)観念である完成に向かっ

て誇らしく飛翔してゆく。人間の諸力の作用が我々とつて巨大なものに見えれば見えるほど、我々の内部に作用する存在意識も一層高く舞い上がる。覆いの中の高い異邦人とは誰なのだろう。これほど多様なかたちで己を打ち明け、外部の対象を捉え我が物にして語りかけるかのようなこの記念碑を残すことが出来る存在とは？我々は、数世紀後に、建築物を散策しながら、芸術家の気持ちを感じ、彼が空想するイメージを予感する。

天に向かつて弧を描く内陣の壮麗さは、あらゆる想像を超える威厳ある簡素さを持つている。途方もない奥行きにほっそりした柱の群れが、太古の森の木々のように立っている。最も高い頂で、木々は枝の樹冠に分かれ、その樹冠は隣の樹冠とともに尖った弧を描き、それらを追跡しようとする眼には殆ど到達不可能である。宇宙の測り難さは限られた空間では具体化され得ないが、支柱や壁のこの大胆な上昇志向の中には留まることを知らない何かがある。それは想像力をいとも易々と無限性の中へ延長してゆく。

ギリシアの建築術は、議論の余地なく、完成されたものの、一致するもの、関連に満ちたもの、精選されたもの、

の、一言で云えば、美なるものの総括である。それに對し、ゴシックのこの支柱は、一つ一つ見ると、葦の莖のように揺れそうだが、多数集まつて柱身に統一されると塊を作り、その真つ直ぐな成長を維持できる。言わば無を礎にした丸天井の下で、それらは軽やかに漂うのだが、それは蔭豊かな森の梢の蒼穹のようだ。——ここでは感覚が芸術的な始まりを大はしやぎで楽しんでゐる。「……」これほど壮麗な建築物が未完成のままに留まらなければならぬのは真に残念である。⁽⁹⁾

ケルン大聖堂は、アミアンの大聖堂を模範に、内陣、三つの翼廊と五つの長堂から成つてゐる。奥行き一四四メートル、幅八六メートル、塔の高さ一六〇メートルのゴシック建築物である。一二四八年にアミアン出身の巨匠ジェラルドによつて起工され（一二七一年まで）、巨匠アルノルトが引き継ぎ（一三〇〇年頃まで）、内陣は一三二二年に奉献されたが、翼廊と長堂および西正面は未完成に終わり、一五六〇年以後はまったく放置されていた。

昔の設計図に基づいて工事が再開されたのはようやく一八四二年のことで、一八八〇年にそれは完成した。第二次

世界大戦中に爆撃で破壊されたが、その後再建されている⁽¹⁰⁾（図版3）。

ゴシック建築に関する本格的な論考は、ヴィルヘルム・ヴォリンガーの『ゴシックの形式問題』（一九二一年初版）（邦訳『ゴシック美術形式論』⁽¹¹⁾）を筆頭に、エルヴィン・パノフスキーの『ゴシック建築とスコラ学』（一九五一年初版）⁽¹²⁾、やO・フォン・ジムソンの『ゴシックの大聖堂』（一九五六年）⁽¹³⁾等の名著がある。ゲルマン民族大移動の時代、イタリアの古代文化を破壊したゴート人（Göte）こそ異質で野蛮な中世芸術の創始者である、としたイタリア・ルネサンスの理論家たちのある種蔑視的な理解（ヴァザリ）を起源にしていたために、十八世紀においても「ゴシック的」*gothic*という言葉には未だ否定的なニュアンスが付随していたが、一八二〇年頃によく、⁽¹⁴⁾ 精確な概念規定がなされたようである（*Lexikon der Kunst*）。

そういうわけで、シュトラースブルク大聖堂をめぐるゲーテの論文「建築術について」（前記『ドイツの様式と芸術』所収、一七七三年刊）やフォルスターの『ライン下流地方の風景』（一七九一年刊）におけるケルン大聖堂に関する所感、ヴォリンガーの研究に一世紀以上も先だっ

て、ゴシック建築の再評価に少なからず貢献したのである。⁽¹⁵⁾ ゲーテもフォルスターも、理論家というよりは文人であるために、彼らの文章は、今日もなお、一般読者にとって感覚的にも理解しやすく、しかもゴシック建築の最も重要な性格を的確に指摘している。

フォルスターはケルン大聖堂の中を「太古の森」に譬える。そそり立つ支柱は森の一本一本の木に他ならず、樹冠が人々の頭上で高く弧を描くように、ドームの天井も枝分かれした支柱によって軽やかに支えられながらアーチを形成している。フォルスターはドーム空間に何よりも「大胆



図版3 ケルン大聖堂、長堂と聖堂内陣、左側に聖ミカエル像

な上昇志向」を感じ取る。ゴシック建築の魅力と迫力はまさしくそこにある。フォルスターはケルン大聖堂の以上の特性を、ギリシア建築との比較から浮き彫りにしているのだが、ヴォリンガーもその著書の中で同様の比較を試みている。

最後にフォルスターは、壮麗なこのドームが未だ完成していない事実を惜しむ。実は、彼のこの発言が契機となつて、後に、ケルン出身の美学者・蒐集家ズルピツ・ボワスレーはケルン大聖堂の古設計図を入手して建築工事の続行を呼びかけることになる (Geisler, Georg Forster)、⁽¹⁶⁾ 彼と交流のあったゲーテもドーム工事の再開に寄与したのだが、実際、当時の絵を見ると、ケルン大聖堂は今日とはまったく異なる外観を呈している。

旅行家で博物学者であるフォルスターのもう一つの顔は、右に見るように、意外にも、芸術批評家としてのそれである。『イギリス芸術史』(一七八九)の著書もある彼は、『ライン下流地方の風景』の中でもしばしば美術に関して所見を述べている。それは彼の紀行文の魅力の一源泉となっている。

三 美術館見学

フォルスターがケルンの次に訪れたのは、ライン河畔の商業都市デュッセルドルフである。今日、公園や散歩道が整備され、ゲーテ博物館や詩人ハイネの生家がある美しい町だが、この都市でフォルスターは美術鑑賞を楽しんだ。

その間に私はグイドの天に上るマドンナ（図版4）にお別れの一瞥を送ることにする。素晴らしい鑑賞に非常に感謝しているので、聖母に関して完全に沈黙することなど出来ないからだ。

ドレスデンで私はこの主題を扱ったラファエロの偉大な作品（図版5）を見た。そこでは、己の所有である玉座にふたたび帰って行くのは天の女王である。彼女は漂っているのではなく立っている、嬉しげというよりは思案しながら。神々しい女性は彼女が属しているのではない世界を去って行く。崇拜する天使たちは歓呼してはいない。彼らは天を祝っている。——グイドのマリアはどうか？ 彼女は人間的にきわめて美しい。今や苦悩か



図版4 グイド・レーニ、「マリア被昇天」、1631／42年



図版5 ラファエロ、「システイーナの聖母」、1512／13年

ら、この世の束縛から解放されて、天を自由に眺める女性である。彼女の陶醉した眼差し、彼女の晴れやかな顔、彼女の広げられた両腕は、筆舌には尽くせない彼女の歓喜を告げている。足元の二人の天使は、グイドの天使に特有の魅力を示しながら、彼女を高々と運び、彼女の衣装に寄り添い、彼女の天上的な愛を喜んでいる。

——否、天使が喜んでいるときは、人間はそれを語ってはならない！

「……」

ギリシアの神々の姿とは異なる美の理想が存在する。これらの天使の中に私は初めてそれを見る。火天「古代ギリシア・ローマ人が考えた最高天／神と天使が住む天上昇」の奇跡に感覚的なかたちを与え、天使の純粹さと、互いに交信する至高の霊の穏やかな火や神々しい青年と優雅の女神の姿をした永遠の晴れやかさの魅力とを組み合わせて造型することは可能であると、私は思ったことがなかった。おお、グイドよ、優しい夢想家よ、貴方の空想を通して夢想は何と人の心をそそることだろう！ この絵の中ではすべてが魔法だ、そして魔法のよう！ この絵は感情を捉える。素描の繊細な精確さ、マド

ンナの姿勢、群れの形、詩全体の優しい典雅さ、エーテルのような衣装の華麗さと優雅さ、そして私は敢えて主張するが、光の世界を視覚化する色彩の眩しい輝き、その輝きを我々の弱々しい眼は殆ど見上げる勇氣さえない！ ここで画家たちは、天使がどのように飛び、神々しい者たちがどのように漂うのかを学ぶべきである。⁽¹⁸⁾

フォルスターは右の一節で、二枚の絵について語る。一枚は眼前のグイド・レーニ（一五七五—一六四二／イタリア・バロック期の画家）の「マリア被昇天」Die Himmelfahrt Mariae（一六三二／四二年作）、もう一枚は彼がかつて見たラファエロ（一四八三—一五二〇）作「システイーナの聖母」(Sixtinische Madonna/ Madonna Sistina [伊語])（一五二二／一三年作）である。

前者、グイド・レーニの「マリア被昇天」は、現在ドイツ・ミュンヘンのアルテ・ピナコテークに所蔵されており、縦二九五×横二〇八センチメートルの油彩画である。フォルスターが見学した当時はデュッセルドルフの美術館にあった。元来はイタリア・モデナのサンタ・マリア・デリ・アンジェリ教会の祭壇画として制作されたものであ

(19)

後者、ラファエロの「システイーナの聖母」は、縦二六五×横一九六センチメートルの油彩画で、一七五四年に、ザクセン選帝侯が購入し、ドイツ・ドレスデンの絵画コレクションション（アルテ・マイスター絵画館）に収蔵された画家最後の聖母像と言われる。(20)

「聖母被昇天」はティツィアーノ等、多くの画家が描いたテーマだが、それに用いられるラテン語 *assumptio* は、「引き受ける」「取り上げる」を意味する動詞 *assumere* に由来する。(21) キリストの昇天が彼自ら天に昇ったのとは異なり、聖母が天使たちによって天に運ばれていった（取り上げられた）ことを暗示する。新約聖書は聖母マリアのことは殆ど語らず、彼女の生涯を詳しく報告する新約聖書外典「ヤコブ原福音書」も晩年のマリアについては触れていないが、中世ヨーロッパで広く読まれたヤコブス・デ・ウォラギネの『黄金伝説』（一一三「聖母マリア被昇天」）(23) は、聖母が十五歳でキリストを産み、三十三年間御子と暮らし、キリストの死後、十二年間生きて六十歳で亡くなったと伝え、次のように語る。

さて、ある日のこと、聖母は、胸におん子にたいする思慕の念がはげしくこみあげてきて、精神は動揺し、涙が滝のようにあふれだした。わが子の慰めの言葉を聞けなくなった日々を平静に生きながらえていくことなどもう耐えられない思いであった。と、そのとき、ひとりの天使「ガブリエル」が大きな輝きにつつまれてあらわれ、主のおん母にうやうやしく挨拶をして、こう言った。「おめでと、恵まれたひとマリアさま、かつてヤコブに祝福をおあたえになったかたの祝福をお受けなさい。ごらんください。楽園から棕櫚の枝をもってきました。これをあなたの棺のまえに立ててもついでいかせなさい。あなたは、三日のち肉のからだからときはなたれ、大きな榮譽をもっておん子に迎えられるでしょう」。(24)

現世の苦悩から解放たれて、天使によって天界へ運ばれてゆく聖母の姿をグイド・レーニは明るい背景の中に描いている。フォルスターは、「陶醉した眼差し」「晴れやかな顔」「広げられた両腕」に聖母の「筆舌に尽くせない歓喜」を見て深く感動し、ギリシアの神々とは違った「美の理想」を天使の姿に認める。素描の「繊細な精確さ」、

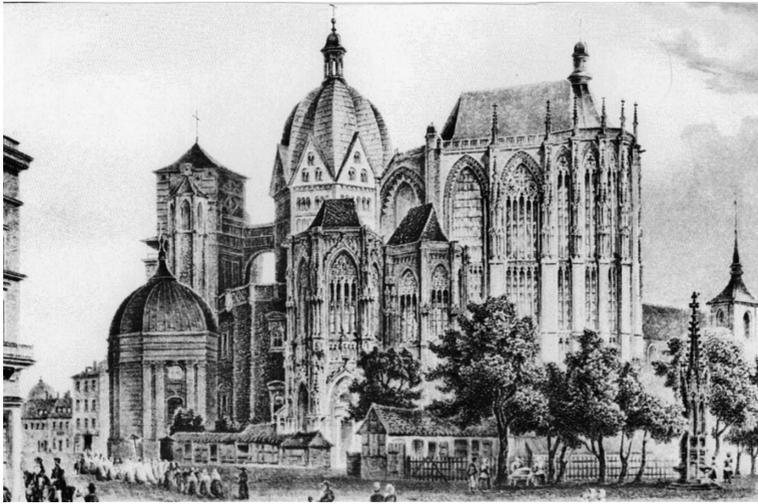
聖母の「姿勢」、天使の「群れ」、そして衣装の「華麗さ」と「優雅さ」、すべては「魔法」*Magie*だ、と彼は讃嘆する。

一方、フォルスターはラファエロの有名な「システイーナの聖母」に、空中を「漂う」というよりは「立ち」、「嬉しげ」というよりは「思案しながら」玉座に帰って行く「天の女王」を見る。この作品は元来、ピアチェンツァのベネディクト会修道院の依頼で、祭壇画の一翼として描かれたもので、祭壇画の中央にキリスト磔刑図が描かれているために、マリアの表情が厳しいようである。²⁵画面左の人物は聖シクストゥス、右側は聖バルバラである。聖母の足元で、片肘をつき、両腕を組んで見上げる二人の天使の愛らしさは何とも印象的である。グイド・レーニの聖母足下の二人の天使もまた実に可愛らしいが、フォルスターはレーニの「マリア被昇天」に何よりも「人間的な美」*menschlich schön*を感じたようで、まさしくそこにこの絵の魅力があるのかも知れない。

四 古都アーヘン

デュッセルドルフを出発したフォルスターは、ベルギーとの国境に近いアーヘンに向かう。「水」「泉」を意味するラテン語 *aquae* を語源とするこの町は、古代ローマ時代に温泉地として知られていたが、とりわけ、カール大帝が当地に都を築いたことで一躍有名になった。シユタウフェン王朝時代、アーヘンは帝国都市として大いに発展を遂げた(図版6)。

アーヘンは、一七九四年から一八一四年まで、フランスに帰属したが、一八一五年プロイセン領となった。フォルスターがこの都市を訪れたのは、フランス領になる数年前のことである。フォルスターはまず、「アーヘンはとても優美に横たわっている。周囲の丘の形状は美しく、森林や畑や建物も豊かだ」²⁶、と町の外観を述べたあと、かつて十万人以上を誇った町の人口が、現在では三万人にまで減少している事実に触れ、人口希薄化の原因を制度の欠陥の責任に帰するのは外れで、アーヘンの没落には様々な要因が複雑に絡まっている、として次のように語る。



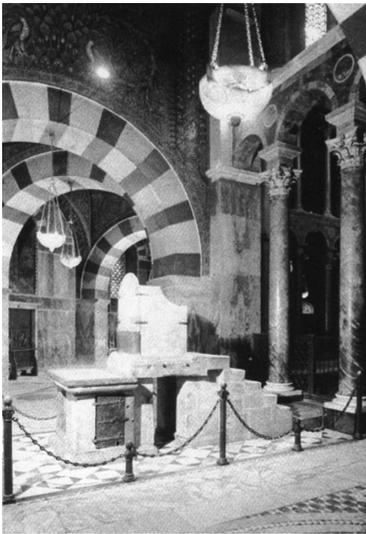
図版6 L・ローボック・J・M・コルプ、アーヘン大聖堂、西側風景、銅版画、1820 / 40年

カール大帝の宮廷があり、多くの皇帝が戴冠した場所は久しく、有用な諸芸術と産業の拠点、重要な商業の集散地であり中心地であった。そこには、帝国の遠隔地から多種多様な関心によってあらゆる階級の人々が集結した。またそこではその合流によって、貨幣がより迅速に流通し、品々がより素早く交換され、少なくともあの時代にはかなりの程度の消費が行われた。「……」

現在、状況はすべて違っている。アーヘンは戴冠の瞬間の皇帝の臨席にも、まして持続的なその滞在にも恵まれていない。皇帝の臨席が与えることが出来た栄光は、この町から退却してしまった。町の周りには、あらゆる方角にやがて立派な国家が成立した。勤勉と自由と幸運が、互いに競い合って、多くの新しい都市に咲き誇る豊かな生活を贈り、商業を他の運河に誘導し、人間の精神を発展させ形成した。離れ離れの場所で、頑固に盲目的に古い因習にしがみついているは生まれ得なかつたような精神を。しかしその後、考えの異なる宗派に対する相変わらずの狂暴さ、非カトリック教徒を市民の多くの特権から締め出す偏見という名の圧制、絶えず名のみ帝

国自由都市の独裁のために戦った様々な党派の暴威、最後に、各種のギルド（同業組合）の陰險な専制主義、こういったものが、習俗の墮落へ、庶民や市民の真に最上のものに対する盲目へ、怠惰へ、乞食へ、そして人口希薄化へと強力に作用した。⁽²⁷⁾

ピピン三世によって七五一年に興されたカロリング朝はヨーロッパの誕生を予告し、⁽²⁸⁾彼の後を継いだカール大帝は、今日のドイツ、フランスおよびイタリアを核としたヨーロッパ中央部にフランク王国を築き、文字通り「ヨーロッパの父」となった。まさしくコスモポリタンとして彼が晩年（七九四年以降）に宮廷を構えたアーヘンには、各国から当代一流の学者が集まった。イギリス「アングロ・サクソン」・ヨーク出身の神学者アルクイン、スペイン出身フランスで没した著作家オルレアンのテオドルフ、イタリア「ランゴバルド」出身の歴史家パウルス・ディアコヌス、そしてドイツではアインハルト。彼は七九四年頃、フルダの修道院から大帝の宮廷に招かれ『カールス大帝伝』⁽²⁹⁾を残す。こうしてアーヘンにカロリング・ルネサンスは花咲いた（図版7）。



図版7 アーヘン大聖堂、皇帝の玉座

ところでカロリング朝は元々、マース河とモーゼル河の間の地域を本拠地とする。⁽³⁰⁾ドイツ、ベルギー、オランダそしてフランス、いずれにも近いアーヘンはその中心とも言える。ゲルマン的要素とガリア的要素の中間地点に位置し、多様な文化を統一的に把握するのに適した位置にある。フォルスターの「ライン下流地方の風景」は、こうした場所への言ってみれば歴史の旅でもあった。

先の引用文の前半はカール大帝時代の栄華に触れている。但し、とフォルスターは続ける、過去の輝かしさは、今やアーヘンから去ってしまった、と。引用文の後半で

フォルスターは、人口減少に端的に現れているアーヘンの衰退の原因に触れ、それは単なる制度の欠陥というよりも様々な角度から考察すべき複雑な問題であると指摘する。そして宗教的な対立（「異なる宗派に対する狂暴さ」、「非カトリック教徒の排除」）や政治的・経済的な偏狭さ（「帝国自由都市の独裁」、「ギルドの専制主義」）等に、彼は都市の衰退や貧富の格差拡大の要因を探る。

『ライン下流地方の風景』から数年後、自由と平等を謳うフランス革命に共感して、フォルスターは活動を開始するが、その心境の根底には、以上のように、社会の現状を鋭く観察し分析して、より良き未来を構築するために必要なものは何かを問う真摯な問題意識が潜在していたのである。彼の紀行文は視野の広いそして緻密な社会批判の眼を土台にしている。

五 フランス語圏へ

古都アーヘンを後に、フォルスターは次にフランス文化の色濃いリエージュ「リュティヒ」に入る。今日のベルギー南東部の町である。『ライン下流地方の風景』の中で

も、この章は場面転換の鮮やかさが際立っている。

魔法の杖の一振りですべて私たちが他の国に移されたかのようだ。私がここで周囲に見るものはすべて、数時間前にアーヘンで後にしたものとは無限に異なっている。町を一瞥しただけで驚きであった。町は遠くからは認められない。なぜなら、それはマース河の深い谷に横たわっているからだ。「……」私は小さな都市を予想していた。そこで大都市を眺めたとき、私は何とびっくりしたことだろう。この町は十万人の住民を抱えることが出来、実際、抱えているのである。³¹

ドイツ語圏の町では感じなかった文化ショックを、フォルスターはこのリエージュで痛感したようだ。彼の言葉通り、リエージュはマース河の谷に広がる都市で、付言すると、カトリックの司教座のあるベルギー南東部ワロン地方の中心地である。

一八三九年にオランダから独立したベルギー王国は、北部が砂丘の海岸地帯、中部は平野部、そして南部はアルデンヌ高地となっているが、首都ブリュッセルの南三十キロ

メートルを境に、北はオランダ語方言のフラマン語を話す
フランドル地方、南はフランス語方言のワロン語を話すワ
ロン地方に分かれ、ブリュッセルでは両言語が併用され
る。ヨーロッパの十字路であるベルギーは、ゲルマン系の
フラマン人とラテン系のワロン人が、言語、宗教、習俗等
の違いから民族的な対立を昔から抱えている。³²

フォルスターがリエージュを訪れたのは、ベルギー王国
成立以前で、一七九五年にフランス革命軍が侵入する数年
前のオランダ共和国の一都市としてである。当時の様子を
彼は次のように叙述する。

絶えず続く街路の騒音と混雑は異様な活気を証言して
いる。入り乱れて走り回る忙しない人々の光景は、大抵
は薄汚れて見えはするものの、久しぶりの法外な楽しみ
を私に与えてくれる。炭焼き、小刀や武器の鍛冶屋、鏡
職人は、粗野だが逞しく、生気に満ちた気性の激しい民
で、彼らの活動はアーヘンの人々の無気力さとは鋭い対
照をなしている。民族の外面的な特徴は、高く張り出し
両側が圧縮された額、広い頬骨、大きくはない黒い瞳、
形のよい時にやや反り返った鼻と厚い唇、完全に綺麗と

いうのではない顔色である。それは従ってフランス人に
近く、明らかにユリッヒ「アーヘン近郊の町」の人々と
は違う。後者は、通常、非常に白い肌色とブロンドの髪
をしており、面長の顔の形とより柔らかい表情によつ
て、オランダ人とのある種の類似性を窺わせる。

リエージュの人々は彼らのフランスの血を否定するこ
とが出来ない。すなわち、彼らは（フランス人と）同じ
ように軽やかで楽しげで、同じように人がよく、同じよ
うに、私はこう言いたいのが、生まれつきの礼儀正しさを
備え、一種類の言語を話す。もともと、お国訛りで余り
に損なわれているために、パリのアカデミー会員は彼ら
を兄弟とは認めないではあるうが。庶民は各種の言語が
入り混じった訳のわからない言語を話す、それはワロ
ン方言の名のもとに一般に知られているものである。³³

引用文の前半、フォルスターは都市の風景と民族の外観
を細やかに活写する。彼は先ず、「騒音」と「混雑」の中
で、「炭焼き」、「鍛冶屋」、「鏡職人」等々が多忙な生活を
営む姿に、アーヘンの「無気力」とは著しい対照を見る。
そして驚きと同時に、「法外な楽しみ」を感じる。澁刺と

日々を送る市民の様子は、洋の東西を問わず、見る人に活力を与えてくれるようだ。国境を越えただけ（魔法の杖の一振り）で、風景に劇的な変化が生じるのは、やはり旅の醍醐味の一つである。

フォルスターは次に、「民族の外面的特色（人相）」*Volksphysiognomien*を克明に記述する。額、頬骨、瞳、鼻、唇、顔色、そして髪の色と顔の形である。それらを観察した彼は、リエージュの人々とアーヘン近郊の町（ユリッヒ）の人々との相違に気づく。前者にはフランス的特徴、後者にはオランダとの類似性が顕著なのだ。旅人の眼は、風土に慣れ過ぎていないが故に、鋭い観察力があれば、様々な都市や住民の特徴の違いを一瞬の中に捉えることが出来る。翻つて考えると、ある意味、これは民族・民俗学者の本領かも知れない。

若き日に、クック船長の許、三年間の世界周航に参加したフォルスターは、実際、民族・民俗学のフィールドワークを体験して、諸民族の特色、動植物の生態、地理を实地に観察していた。⁽³⁴⁾『ライン下流地方の風景』は、いわばヨーロッパ中枢部でのその応用編に他ならない。

引用文の後半、リエージュの人々の民族的性格と言語に

ついて、フォルスターは観察結果を報告する。彼によれば、当地の人間には「フランスの血」が色濃い。「軽やかで楽しい」*leichtsinnig-fröhlich*、「人がよく」*gutmütig*、生来の「礼儀正しさ」*Höflichkeit*を持ち合わせ、「一種類の言語」*einheitl Sprache*、すなわちフランス語方言ワロン語を話すリエージュ人。

ドイツ語、英語、ポーランド語、ロシア語、フランス語等々をマスターし、まさしくポリユグロットとして通訳や翻訳の仕事もこなしたフォルスター⁽³⁵⁾は、フランス語は方言のレヴェルで聞き分けることが出来たようである。⁽³⁶⁾思えば、これも前述、民族・民俗学者の必須条件である。その意味で、『ライン下流地方の風景』は民族学と民俗学の旅であった。葡萄栽培の地理的環境を詳述した同書の箇所等⁽³⁷⁾を想起しても、フォルスターがエスノロジ⁽³⁸⁾やフォークロアの先駆者の一人に数えられるのも当然である。

リエージュの章を読むと、紀行文学を内容豊かなものにするための要件の一つが、民族と民俗の精緻な観察であることが分かる。この点でも、フォルスターの『ライン下流地域の風景』は群を抜いた紀行文学と言つてよい。

ところで、リエージュの町でフォルスターは、以上の他

に、決定的な体験をする。その箇所を引用する。

私たちは通りを散策し、実体験によって支配的な気分を確認するために、出来得る限り民衆に会見しようと試みた。人々を話題にのせるには技術は必要なかった。彼らは例外なく政治的な情況に関して談論風発で、信じ難いくらいの熱心さでそれに関わり、すべての自由な民族と同様に、現時点で、彼らの個人的な欲求よりは公的な問題に勤しんでいるように思われた。〔……〕

飲食店やカフェで我々は熱心な新聞の読者を見かけた。ごく普通の男性でさえ一杯のビールを飲みながら、人権や、数年前から遂にこの安定した国に流行り出したすべての新しい熟考すべき政治問題について論じていたのである。⁽⁴⁰⁾

一七九五年、当時のオランダ連合国はフランス革命軍によって侵入・征服され、バタヴィア共和国となった。フォルスターがリエージュを訪れたのはその五年ほど前で、町の雰囲気を観察しながら、人々がいかに政治問題に熱心に関わっているかに彼は驚きを感じる。町のあちこちの店

で、一般人が新聞を読み、人権等、重要なテーマを論じている。住民の異様なほどの政治への関心の強さに彼は圧倒される。今回詳しくは措くが、フォルスター自身が旅から帰国後、マインツで政治活動を開始したことを想うと、リエージュ体験が彼にとつていかに大きなショックであったかが今更のように理解される。

結語

ゲオルク・フォルスターの『ライン下流地方の風景』は、ゲートの『イタリア紀行』*Italienische Reise*（一八一七―一七七年刊）やハイネの『旅の絵』*Reisebilder*（一八一六―一三一年刊）等、ドイツ紀行文学の系譜の中にあつて、多様かつ深いその内容によって、独自の位置を占めている。本稿で扱った同書の前半だけでも、伝説を含む風土の紹介、ゴシック建築の魅力、美術館の名画案内、古都の歴史解説、また異国の風景等、多種多様な話題が繰り広げられ、読者の眼前には、各土地や都市の在り様が、空間軸と時間軸両方の視点から活き活きと彷彿としてくる。わけても注目されるのは、フォルスターが、都市の活気を指標

に、市民生活の様子を観察していることである。隣国で勃発した革命の影響がヨーロッパ各地に及ぶ状況下、都市が沈滞しているか（アーヘン）、あるいは盛況か（リエージュ）を、彼は「風景」の中に肌で感知する。そして前者衰退の要因を、政治的・経済的な側面から分析し、改革の可能性を探る。そうした社会批判的要素（ギルドの専制的体質等）が介在していることよって、フォルスターの紀行文は読者にアクチュアルな鋭さと深さを感じさせる。

ところで、『ライン下流地方の風景』には第三部が断片として残されている⁽⁴⁾。そこでは、第一部と第二部では言及されていないイギリスとフランスの「風景」が記述されている。紀行文の全体像を描くためには、第三部を含めた総合的な読解がなされなければならないが、それは他の機会に譲り、今回はこの作品の特色を素描するべく、第一部・第二部の前半部分から幾つかの箇所を考察した。

それにしても、本の題名にある「風景」Ansichtは意味深い。このドイツ語には「風景」の他に、「視察」⁽⁵⁾さらに「見解」「見方」の意味がある。フォルスターが『ライン下流地方の風景』をタイトルに選んだ意図には、シユエイナーが指摘するように、「感覚的に把握できるもの」と

「省察」との間のダイナミックな関係⁽⁶⁾が恐らく隠されている。

一般に、紀行文が魅力あるジャンルとして成立するためには、肌で感じる「風景」と、省察によって明らかになる「風景」が二重映しに浮かび上がってくる必要があるのかも知れない。フォルスターはその間の機微を了解の上で Ansicht という語を用いたにちがいない。

註

- (1) Forsters Werke, Bd2 所収。
- (2) アレクサンダー・フォン・フンボルト Alexander von Humboldt 一七六九—一八五九、ドイツの自然科学者、地理学者。スペイン、中南米等を旅行した。ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（一七六七—一八三五）の弟。
- (3) Forsters Werke, Bd.1, SVLVI (Einleitung) / G.Steiner, Georg Forster/U. Enzensberger, Georg Forster 参照。
- (4) Georg Forster, Werke in vier Bänden (Insel Verlag), Bd. II
- (5) dtv Brockhaus Lexikon, Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1982, Bd.2 (Belgien), Bd.1.3 (Niederlande).
- (6) Forsters Werke, Bd.2, S.18.
- (7) Deutsche Sagen, herausgegeben von den Brüdern

- Grimm, Ediert und kommentiert von Heinz Rölleke, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1994, Nr.241, S.279-280.
- (8) Herder/Goethe/Frisi/Möser, Von deutscher Art und Kunst/Einige fliegende Blätter, herausgegeben von Hans Dietrich Irmscher, Philipp Reclam jun, Stuttgart, 1981, S.93-104 (Von Deutscher Baukunst).
- (9) Forsters Werke, Bd.2, S.44-45.
- (10) div Brockhaus, Bd.10, S.41 (Köhler Dom).
- (11) Wilhelm Worringer, Formprobleme der Gotik, in: Schriften, Hrsg. von H. Böhringer, H. Grebing und B. Söntgen, Bd.1, Wilhelm Fink Verlag, München, 2004, S.151-209, 邦訳『ロシック美術形式論』ウイールホルム・ヴォリンガー／中野勇訳, 岩崎美術社, 一九八六(初版六八)年
- (12) 『ロシック建築とスコラ学』アーウィン・パノフスキー／前川道郎訳, ちくま学芸文庫, 二〇〇一年
- (13) 『ロシックの大聖堂』O・フォン・ジムソン／前川道郎訳, みすず書房, 二〇〇二(一九八五)年
- (14) Lexikon der Kunst, EA Seemann Verlag, Leipzig, 2004, Bd.2, S.806-811 (Gotik).
- (15) Von deutscher Art und Kunst, S.189-194 (Nachwort), ちなみに、ヴォリンガーはゲーテのロシック建築論にしば
- し⁴⁵言及しつつは⁴⁶ Wilhelm Worringer, Fragen und Gegenfragen, in: Schriften, Bd.1, S.833-940. (S.852, 854, etc.)
- (16) G. Steiner, Georg Forster, S.62-63.
- (17) Gero von Wilpert, Goethe-Lexikon, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1998, S.576-577 (Kölnener Dom).
- (18) Forsters Werke, Bd.2, S.114-115.
- (19) Die Alte Pinakothek München, von Erich Steingraber, C.H. Beck, München, 1985, S.28.
- (20) Gemäldegalerie Dresden, Alte Meister, Katalog der ausgestellten Werke, Staatliche Kunstsammlungen Dresden, E.A. Seemann, Leipzig, 1992, S.308-309.
- (21) Lexikon der Kunst, Bd.3, S.261-263 (Himmelfahrt Mariä).
- (22) 『聖書外典偽典』6 「新約外典」1, 教文館, 一九九八(七六)年, 八一—一四頁(八木誠一・伊吹雄共訳)
- (23) 『黄金伝説』3 「ヤコブス・デ・ウォラギネ」前田敬作・西井武訳, 人文書院, 一九八六年, 一八六—二三三頁
- (24) 同書, 一八七頁
- (25) 註(20)参照
- (26) Forsters Werke, Bd.2, S.119.
- (27) aaO., S.119-120.
- (28) Enzyklopädie des Mittelalters, 2Bde., hrsg. von Gert Melville und Marital Staub, Wissenschaftliche

- Buchgesellschaft, Darmstadt, 2008, Bd.2, S.316f.
- (29) 『カロルス大帝伝』エインハルトゥス／國原吉之助訳・註、筑摩書房、一九八八年
- (30) 註(28) 参照
- (31) Forsters Werke, Bd.2, S.146-147.
- (32) div Brockhaus Lexikon, Bd.2, S.180-181 (Belgien).
- (33) Forsters Werke, Bd.2, S.148.
- (34) 註(3) 参照
- (35) Gerhard Steiner, Georg Forster, S.8-12.
- (36) Forsters Werke, Bd.2, S.148-149.
- (37) aa.O., S.19.
- (38) Forsters Werke, Bd.1, S.XIII (Einführung).
- (39) Forsters Werke, Bd.2, S.152.
- (40) aa.O., S.153-154.
- (41) 註(4) 参照
- (42) Gerhard Steiner, Georg Forster, S.63.
- テキスト／参考文献 (*他の参考文献は註を参照)
- ・ Forsters Werke in zwei Bänden, Aufbau-Verlag, Berlin und Weimar, 1979.
 - ・ Georg Steiner, Werke in vier Bänden, hrsg.von Gerhard Steiner, Insel Verlag, Frankfurt am Main, 1967-1971.
 - ・ Georg Forster, Reise um die Welt, Hrsg. und mit einem Nachwort von Gerhard Steiner, Insel Verlag, Frankfurt am Main, 1983.
 - ・ Georg Steiner, Ansichten vom Niederrhein. Eine Auswahl, Hrsg. von Ludwig Uhlig, Philipp Reclam jun, Stuttgart, 1981.
 - ・ Gerhard Steiner, Georg Forster, J.B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart, 1977.
 - ・ Georg Forster, Weltumsegler und Revolutionär, Verlag Klaus Wagenbach, Berlin, 1979.
 - ・ Wolf Lepenies, Autoren und Wissenschaftler im 18. Jahrhundert, Carl Hanser Verlag, München/Wien, 1988.